

2012 年度御挨拶

東京医科歯科大学大学院 歯科心身医学分野
教授 豊福 明

東日本大震災からもうすぐ2年が経ちます。先日、「遺体～明日への十日間～」という映画を見ました。あの時、僕は柳葉敏郎さん演じる歯科医師 正木明先生のような尊い役割を果たせませんでした。だからこそ今でも自分ができること、なすべきことへの意識を高め続ける必要があると考えています。

あの時から日本中のあちこちのシステムの綻びが明白になっています。それなのに、また性懲りも無く「あれは無かった」かのような空気に戻ってしまう人がいます。昨日と同じようにして、明日も生きていきたいと願う人たちがいるというのは事実です。人間のすることに惰性は強いものです。

当たり前のことですが、「御茶ノ水が日本の全てではない」と教室員や学生に強調しています。東京医科歯科大にいただけで安住してはいけない、ぬくぬくと同級生や先輩・後輩に囲まれているだけで、本当に国民に還元できるような実力はつくのか？常に「もっと上、もっと先」を見据え、日本全体を見渡して、歯科界はこれでよいのか、いつも襟を正す必要がある、と。選ばれた者には、その責任と覚悟を背負う義務があります。自律と自立が大事になります。

そのためにも

- ・ やらされるのではなく、自分で規範を持つ
- ・ テストに出ない、保険点数のつかないことを喜んでやる
- ・ 2, 3上のポジションの発想で仕事する

といった積極性と自主性、そして自分を高める不断の努力が必要でしょう。

また教室の若い先生たちや学生さんたちが

- ・ 自分にとって面白いテーマを見つける
- ・ 常に新しいことに挑む
- ・ 最先端に触れる

といったことを実現しやすいように工夫を重ねています。

若いうちは、努力する気になればいくらでもやれることはあります。この時期の吸収力と伸びは、後からでは取り返しがつきません。過ぎていく時間をどう使うのか、今、何を身につければよいのか、を常に意識して大学での時間を貪欲に過ごして欲しいと思います。

昨年度の春から、年度初めから年度末へズレたままですが、2012年の当分野の活動や個人が考えたことなどをご報告し、ご挨拶に代えさせていただきますと思います。

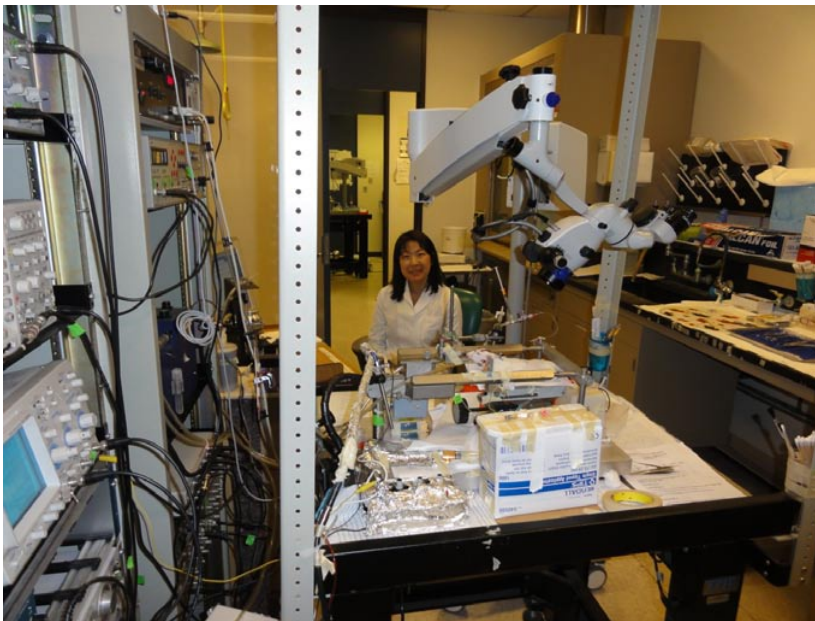
(2013年3月6日)

2月;片桐先生アメリカ留学

大学院 3 年生生の片桐先生が、2012 年 2 月からミネソタ大学歯学部（University of Minnesota, School of Dentistry, Department of Diagnostic and Biological Sciences）に留学しています。三叉神経領域の慢性疼痛のメカニズムをテーマに基礎研究三昧の生活です。海外の生活で大変な事もあるでしょうが、楽しいことはもっと多いはずです。日大生理学教室の岩田幸一教授と篠田雅路准教授のご指導に感謝しております。

学位論文は早くも 3 月に *Mol Pain* に掲載され、学位審査も 6 月に速やかに合格しました。この研究で片桐先生は本学の平成 24 年度大学院学生研究奨励賞を受賞しました。

本場で最先端の研究生活を経験し、大きく成長して帰国されることと期待しています。



3月；加藤先生・佐藤先生、大学院卒業

加藤先生は、本学の難治疾患研究所から分野変更して第 4 世代の抗うつ薬 SNRI であるミルナシプランが用量の違いによって舌痛症に対する効果がどう違って来るのかを臨床で研究しました。*Clinical Neuropharmacology* にその結果をまとめた論文を発表しました。

このお薬は比較的低容量で良い効果が得られる患者さんが多いのですが、それで効果が不十分な場合は増量することで症状が改善する患者さんもいることを明らかにしました。

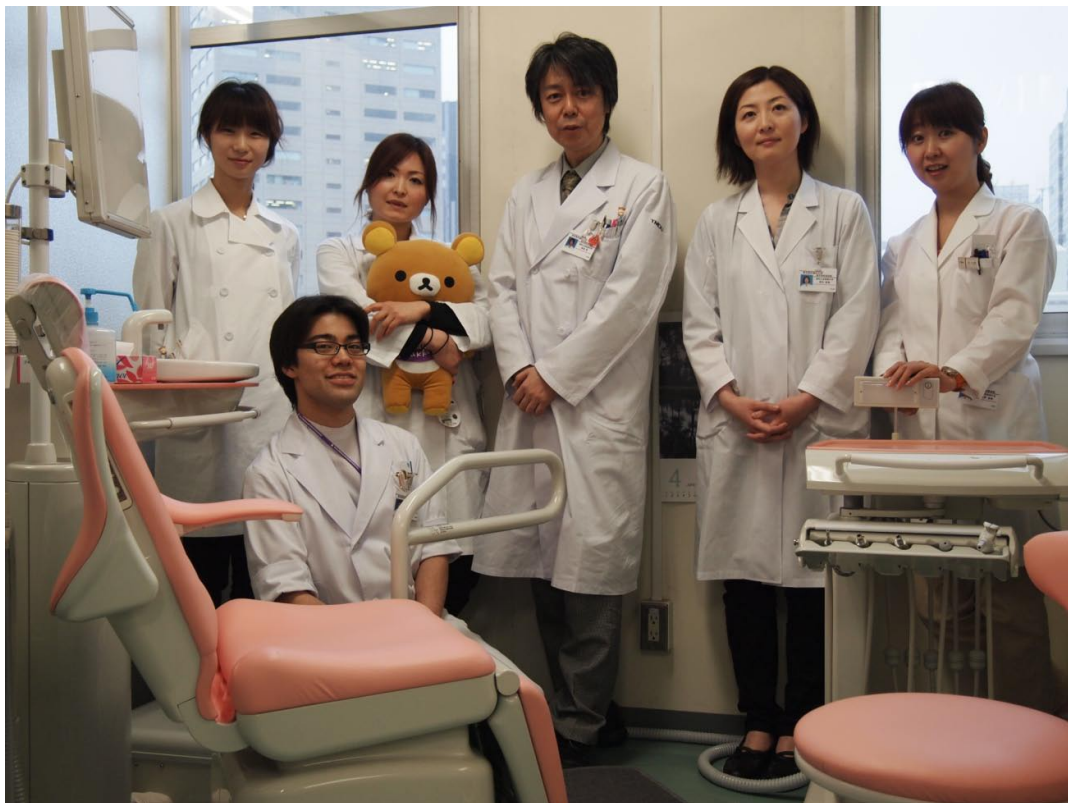


佐藤先生は、最近マスコミを賑わしている歯科インプラント絡みの歯科心身症を 100 例以上集積し、その特徴や治り方に関連する因子を研究しました。学位論文は、日本口腔科学会雑誌に掲載されました。特に患者さんがインプラントの除去を希望されても、実際に抜いてしまうと却って予後が悪い、つまり治りが悪くなるという結果は非常にインパクトがあると賛辞をあちこちの先生方から頂きました。

二人とも臨床のデータをこつこつとまとめ、立派なデータにしました。加藤先生は母校に戻り、アカデミックポジションを獲得しました。この経験をベースに今後も臨床研究を発展させてもらいたいと思います。

4 月 ; 外来の新メンバー

2012 年 4 月から、外来のメンバーも少し入れ替わりました。矯正歯科から酒向先生、口腔外科から佐久間（倉沢）先生が医員で加入しました。女性の多い華やかな職場になりました。



最近、顎矯正手術絡みの患者さんで苦労していたこともあり、大きな戦力アップです。

また二人とも大学院を修了され博士号も取得済ですので、研究面でも院生の相談に乗ってくれたりで大助かりです。

2012 年 2 月 18 日、お隣の順天堂大学心臓外科の天野篤教授が天皇陛下の冠動脈バイパス手術を見事に成功されました。天野教授の御著書「一途一心、命をつなぐ」を拝読し、

大きな感銘を受けました。多くの医師が、家にも帰らず病院に泊まり込みで患者さんに献身的に尽くす姿は美しいものです。個人的には若い頃にそう言うことが何度かありましたし、いつまでもそうありたいと思います。

しかし、長女が生まれたばかりの頃、歯科心身症患者さんの入院を一度に10名くらい担当せざるを得ない時期がありました。もちろん通常業務は減るわけでもなく、家は家で大変で身も心もガタガタになりました。しかも、自分では頑張ったつもりでも総てがきっちりできたわけでもなく、無理をしても治療結果が上手く出ないと結局患者さんにとっても何も益にならないのではないかと痛感しました。

熱心な先生の場合、当然そのご家族にしわ寄せが行きます。若いうちの修行は必須の過程ですが、家庭を大事にできることも患者さんを大事にできることに繋がるのではないかと、とも思います。どちらも大事にしたいと欲張る人間にとっては、毎日命懸けよりはちょっと余裕を持って勤務が可能な歯科医師という仕事はぴったりかもしれません。

当科にはママさんやもうすぐママさんの女性歯科医師がいます。独身スタッフに負担が全部行ってはいけませんが、家族も大事にしながら、患者さんにベストを尽くせる職場環境を構築できたら理想的だなあと考えています。

4月；歯科と精神科の連携懇話会勉強会

今年も多くの先生方と学び合う機会がありました。

もう3回目になります4月の「歯科と精神科の連携懇話会」では、三井記念病院精神科部



長 中嶋義文先生や日比谷パークサイドクリニック院長 立川秀樹先生に大変お世話になりました。

また本学6年生の学生さんたちも勉強会に参加してくれました。

歯科の殻に籠もって自分のことだけするのではなく、他科の先生と連携をとりながら自身の専

門性をもっと活かせる歯科医師になって欲しいと思います。

6月；PIPCセミナー



6月には、念願の PIPC 研究会主催の「学校へ行こうセミナー in 順天堂大学」に参加させて頂くチャンスを与えられました。

PIPC とは、Psychiatry in Primary Care の略で、精神科を専門としない医療職が自らの専門領域において適切な精神的対応ができるようにするための知識やスキルを提供する学習プログラムです。問診や治療技術の向上のため、昨年より、成書や DVD を買い求めて

自習はしていたのですが、2月の不安障害学会で1時間の講義を受けたのが PIPC 研究会との御縁の始まりです。DVD も良く出来ているのですが、セミナーのこのライブ感覚には敵いません。面白すぎるプレゼンとシンプルかつ鮮やかなスライドにすっかりやられてしまいました。早速、大学院や歯学部教育にもフィードバックできるよう試行錯誤を開始しました。貴重な奥義も資料も惜しげも無く開陳された、熱血ファシリテーターの井出先生、宮崎先生、木村先生に篤く感謝しております。

12月にも、「PIPCセミナー・ベーシックコース in 福島県立医科大学 2012」に当分野の竹之下先生と参加させて頂きました。

順天堂大学では学生さんが自主的に運営されていたようですが、福島県立医大では医療人育成・支援センター (CMECD) という大学の組織の強力なバックアップが得られているようでした。県庁との連携も密とのことで福島県の医療への期待というものをひしひしと感じました。雪の福島で、いろいろな先生方や学生さんたちと学ぶ中で、地域医療の問題を更に深く考え直す良い機会となりました。



全国の医学部の学生さんたちはとても熱心でした。歯学部の学生さんもちらほら参加しておられとても嬉しく思いました。本学歯学部の学生さんたちにも絶対お勧めです。

25年度の第28回日本歯科心身医学会でも、宮崎先生、木村先生にこの PIPC セミナーを開催して頂く予定です。もっと歯科界にも広まると、救われる患者さんがもっと増えていくはずとわくわくしています。

9月；歯一薬連携の会



もう通算5回目ですが、近隣の調剤薬局の先生たちと歯科心身症の勉強会を続けています。

例えば「舌痛症」専用のお薬というものは世界中に存在しないため、保険適応外処方どうしても多くなります。薬剤師さんが、処方せん1枚から、保険の効能書きと実際の標的症状とのギャップを推測することには非常な困難を伴います。そのギャップを埋めることに薬局の先生たちもとても熱心で、どんどん歯一薬のコミュニケーションが良くなってきています。服薬指導や患者さんのご相談への対応は、もしかしたら他の科より深いレベルで実践されているかもしれません。このご縁で「クレデンシャル」という調剤薬局向けの雑誌の取材を受けることになりました。

4月～9月；梅ちゃん先生

「あすか」以来久しぶりにハマって、家族揃って見たNHK朝の連続ドラマです。「神様のカルテ3」も読みましたが、イチ先生はとうとう大学に戻ってしまいます。それはそれで一つの見識ですが、個人的には最初のイチ先生のように地域医療に殉じて、自分の専門だけではなく患者さんを人として診る医療が好きです。矛盾しますが個人的には何かを極めたいという欲は強い方で、天野教授のようなスーパードクターにも憧れます。イチ先生の気持ちも非常に良く分かるつもりです。一方、町医者として地域の患者さんに寄り添う梅ちゃん先生も僕の一つの理想像です。もともと山口県の田舎町で開業するつもりでしたので、オールラウンドに対応できる能力は必要不可欠だと考えていました。東京のように直ぐ傍にその道のエキスパートがごろごろ居られれば良いのですが、地方では必ずしもそうはいきません。得意技を研ぎ澄ませる努力はもちろんのこと、それ以外の事も自分できなければどこに相談するのがベストか、幅広く医学的素養を深めておきたいと常々考えています。

10月；ミスターホークス小久保選手の引退

私事ですが、23年間福岡に住んでいて、そのうち半分くらいは福岡ドーム（現ヤフオクドーム）のすぐ近くに住んでいました。1999年のダイエーホークスの初優勝などは本当に嬉しくて、医局の同僚とお酒を飲みながら大いに盛り上がったのも良い思い出です。当時からホークスの主力であった小久保裕紀選手が今季限りで引退を表明しました。

自伝「一瞬に生きる」を拝読し、勉強熱心、向上心の塊のようなこの選手へのリスペクトがさらに深まりました。突然の巨人移籍にはいろいろな事情があったようですが、伝統の巨人軍の第69代4番打者と生え抜き以外の初の主将まで務めたことで、他球団の中心選

手が巨人に来て成績を遺せないというジンクスを見事に覆してくれました。ホークスの実力を見せつけてくれたような気がして、随分溜飲を下げたものです。3年後に福岡ソフトバンクホークスに復帰する前後に綴られた王監督との師弟関係など、本当に美しい話でした。いろいろ美しくないことが多い世の中だからこそ、このように義を貫いた人物の良さが光るのでしょう。

プロ野球に限らずどの領域でも「東京の者なんかには負けない」という実力者は、地方にも大勢いらっしゃいます。福岡から東京に来て「何やってるの？」と誇られないよう、小久保選手のように謙虚に食欲に仕事をしていきたいと思えます。

11月；慢性疼痛医療連携の会

頭痛治療でご高名な、秋葉原駅クリニック院長 大和田潔先生（本学神経内科臨床教授）と勉強会が実現しました。以前より患者さんの紹介などでお世話になってきましたが、頭



痛と歯痛の意外な関係について、目から鱗のお話を賜ってきました。

一見メンタルな問題に見えても、脳内のメカニカルな機序で起こっているところには治療の余地が大いにあります。また徒に症状をこじらさないようにするための新しい医療のあり方など大変勉強になりました。日大駿河台病院ペインクリニックの勝

田先生にも大変お世話になりました。生涯を見据えてなるべく不要な治療や通院を防ぐ、という新しい医療のコンセプトも含め、今後の大きな発展が期待できる領域です。大和田先生と一緒に少しずつでも大きな輪にしていきたい、若い人たちを育てていきたいと思えます。

11月；第2回 精神科・歯科心身医療外来による医科・歯科連携セミナー

昨年に引き続き、本学医学部の精神行動医科学分野との合同セミナーを開催しました。口腔領域のセネストパチーや慢性疼痛について共有する症例をもとに深く突っ込んだ議論を交わしました。西川教授以下、精神科スタッフの先生方のご高配で、年々連携が高度にかつ深まっています。

この後しばらくして、放射線科と精神科との共同研究でまとめていた梅崎先生の論文が

Eur Arch Psychiatry Clin Neurosci に accept されるという嬉しい成果につながりました。



このように多くの先生方のご協力を得ながら、当科だけでは問題解決が難しい領域の患者さんにも幅広くベストな診療ができる体制の構築を図っています。

一方で僕たちが一生懸命診るべき歯科心身症に関しては、各科の専門医が集まり、それぞれの担当部分を分担治療すれば制圧できるという疾患では決してないと思います。中枢を巻き込んだ歯科的症状、言わばところと歯が複雑に絡み合った病態に対応しうる総合的医療。それが当科の目指す新しい歯科心身医療です。医療連携は重視しますが、歯科の問題については主治医能力を失わないというスタンスを堅持したいと思います。

12月；米長邦雄永世棋聖御逝去



高校 2 年生の時に米長邦雄先生の「人生における勝負の研究」を拝読して以来、将棋も指したこともなくせに大の米長ファンでした。先生の書かれた本は大概読破していると思います。

3 年ほど前に尊敬する先輩のご高配で米長先生と一緒に食事する僥倖に与りました。厚かましくも 30 年前に購

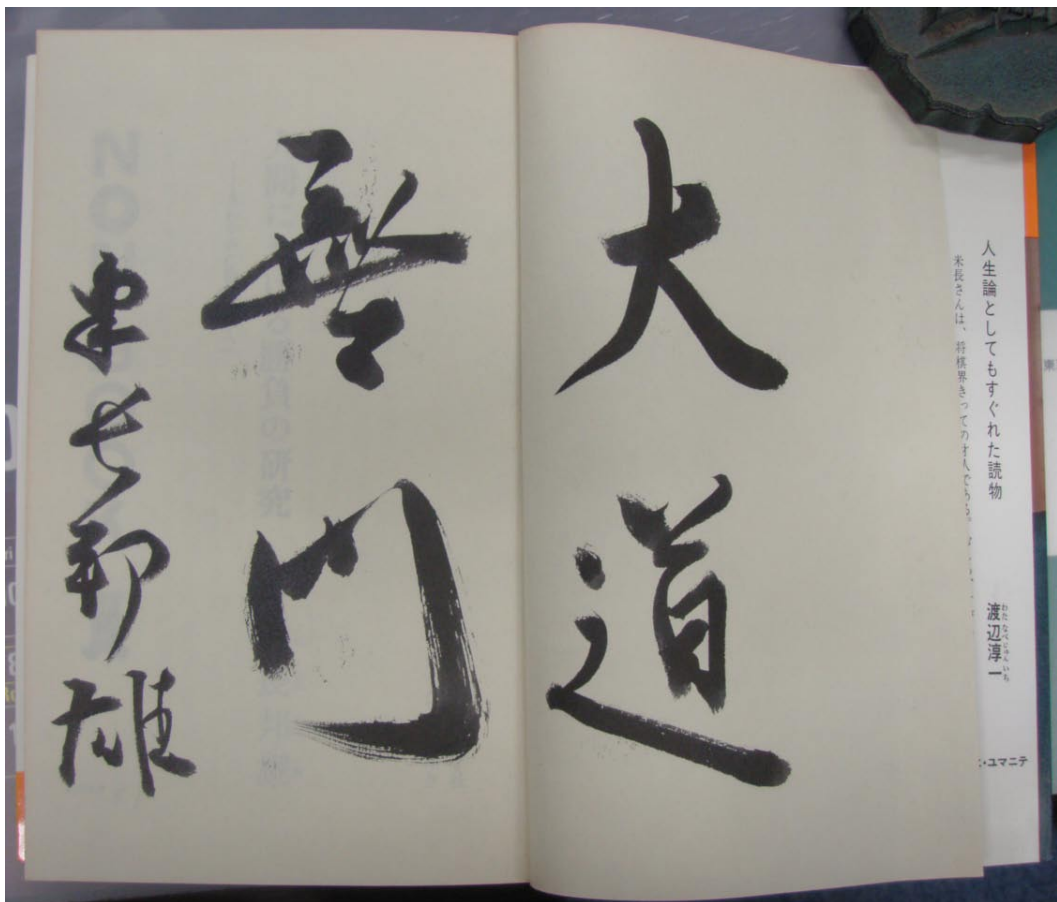
入した上記御著書に「大道無門」の揮毫を頂きました。

その米長先生が2012年12月18日にご逝去されてしまいました。とても残念でなりませんが、もともと直にお逢いできたことすら奇跡的なことです。むしろそのご縁を感謝し、大切にしていきたいと思いました。

晩年は将棋連盟会長として、こどもたちへの将棋の普及と世間での認知向上に全力を尽くしておられたようです。後進の育成と専門領域の普及は、僕のテーマとも大いに重なるところです。

「大道無門」、真理の世界の世界に到るには、どの道を選び、どこから入ればよいかなどと云うこだわりは不要である。日常生活の中にある一切のものが修行になる。しかし、入るべき入り口がないと、そうそう簡単には通過できない。しっかりと目標を定めて足元の修行が肝心である、と解釈しています。

頂いた揮毫を見ていると、誠に僭越ながら「頑張れよ」とお声をかけて頂いているような気がします。米長先生のように、泥沼もさわやかも併せ持った人生と天晴れな終盤を目指して精進したいと思います。



(2013年3月6日記)